【表2】 知的発達症の重症度

重症度	概念的領域	社会的領域	実用的領域
軽度	就学前は明らかな差はないかもしれない。支援があれば、読字、書字、算数、時間または金銭などの概念を習得できる。成人期は、計画性や優先順位の設定、柔軟な思考、短期記憶などが障害される。	会話、コミュニケーションは年齢相応より未熟。社会的な状況における危険性の理解は限られ、他人に操作される危険性（だまされやすさ）がある。	身の回りの世話は年齢相応に可能かもしれない。概念的な技能に重点をおかない職業に雇用されることが多く、決断を要する仕事には支援を要する。一般的に子育てに支援が必要である。
中等度	発達期を通して、同年代と比べて明らかに遅れる。学齢期は同年代の発達と比べ明らかに制限される。成人期は、仕事や私生活における学習技能の応用すべてに支援が必要である。	話し言葉は同年代に比べ単純である。社会的な合図を正確に理解、解釈できないかもしれない。社会的な判断能力および意思決定能力は限られている。	身の回りのことを行うことは可能であるが、自立には長時間の指導と時間が必要で、注意喚起も必要。就労には同僚、監督者などのかなりの支援が必要。娯楽に関する技能は発達しうる。
重度	概念的な能力の獲得は限られている。書かれた言葉、数、量、時間、および金銭などの概念はほとんど理解できない。生涯を通して問題解決にあたって広範囲に及ぶ支援を要する。	単純な会話と身振りによるコミュニケーション。	日常生活上の行動に援助を要する。家庭、娯楽、仕事に継続的な支援及び手助けが要る。
最重度	認識できるものは目の前の物理的なものに限る	いくつかの単純な指示や身振りは理解するかもしれない。自分の欲求や感情の多くを非言語的に表現する。	日常的な身体の世話、健康、安全のすべての面において他者に依存する。

（DSM-5より、一部改変）